

法然詠出和歌の研究

伊 藤 真 宏

一 はじめに

この研究は、法然の和歌をテキストにして法然浄土教の特質やその信仰論を明らかにしようとするものである。和歌を素材にするのは、その中に法然の内的心情や真実の浄土教信仰が吐露されるとみられるからである。まず研究を進めるにあたって、法然真作の和歌を見極めなければならない。

法然が自ら詠んだ歌は現在、短歌二十二首と今様風の歌一首の計二十三首の和歌が一応真作として認められているようである（『昭和新修法然上人全集』）。しかしこれには問題があるといわねばならない。先にもこの件について問題提起という形で発表したが、さらに論を進めて、法然の和歌の真偽についてのべてみたい。

二 法然の歌

現在法然の真作とされる和歌は次の如くである。

- A さへられぬひかりもあるををしなへて へたてかほなるあさ
かすみかな
- B われはたゞほとけにいつかあふひくさ ころのつまにかけ
ぬ日そなき
- C あみた仏にそむるころのいろにいては あきのこすゑのた
くいならまし
- D ゆきのうちに仏のみなをとなふれば つもれるつみそやかて
きえぬる
- E かりそめの色のゆかりのこひにたに あふには身ををしみ
やはする
- F しはのとにあげくれかゝるしらくもを いつむらさきの色に
みなさむ
- G あみた仏といふよりほかはつのくにの なにはのこともあし
かりぬへし
- H 極楽へつとめてはやくいてたゞは 身のおはりにはまいりつ
きなん

I 阿みた佛と心はにしにうつせみの もぬけはてたるこそそす
しき

J 月かけのいたらぬさとはなければとも なかむる人の心にそす

む

K 往生はよにやすけれとみなひとの まことの心なくてこそせ
ね

L 阿みた仏と十こゑとなへてまどろまむ なかきねふりになり
もこそすれ

M ちとせふるこまつのもとをすみかにて 無量寿仏のむかへを
そまつ

N おほつかなたれかいひけむこまつとは 雲をさゝふるたかま
つの枝

O いけのみつ人のこゝろにたりけり にこりすむことさため
なければ

P むまれてはまつおもひ出んふるさとに ちきりしものふか
きまことを

Q 阿弥陀仏と申はかりをつとめてに 浄土の莊嚴みるそうれし
き

R 露の身はこゝかしこにてきえぬとも こゝろはおなし花のう
てなそ

S いけらは念仏の功つもりしなは浄土へまいるんとてもかく
てもこの身にはおもいわつらふ事そなき

T これを見んおり／＼におもひて、南無阿弥陀仏とつね
にとなへよ

U ことらくもかくやあるらむあらたのし とくまいらはや南無

阿弥陀仏

V いかにしてわれこくらくにむまるへき みたのちかひのなき
よなりせは

W 不浄にて申念仏のとかあらは めしこめよかし弥陀の浄土へ
S 以外は『昭和新修法然上人全集』で真作として扱われてい
るものである。これに岸信宏氏がSを加えて、以上二十三首

が真作とされている(同氏稿「法然上人の和歌に就いて」。ここ
で問題になるのは『昭和新修法然上人全集』が真作の判定ラ
インを『法然上人行状絵図』(以下『四十八巻伝』と称する)に

置いていることである。周知のように『四十八巻伝』は法然
寂後百年を経て成立したとみられ、ここに歴史的事実でない

ものが掲載されていることも知られている。資料のA—Sま
だが『四十八巻伝』にあるもので、A—Qは三十巻、Rが三

十四巻、Sが二十一と二十八巻に収められている。藤堂恭俊
氏は真偽について明言をされないまでも『黒谷上人語燈録』

(全十八巻、十一〜十五巻は和語で記され、『和語燈録』一〜五巻と
称する)に収められる和歌と『四十八巻伝』のそれとを比べ、

両者に共通して所収される和歌を素材にして論じられ、『四
十八巻伝』所収の和歌すべてを認めていられない(同氏稿「法

然詠出和歌の研究(伊藤)』)

然浄土教における念仏信仰の内実」。

三 歌の真偽

ここで法然の和歌が収められる史料を一覧してみると、表のようになる。和歌を収める伝記や語録を、成立年代の古いといわれる順に並べ、歌をより古い文献に載る順番に並べ換えたものである。特徴的なこととして、伝法絵と弘願本が同系統であることは従来から指摘されるが、それはここでも伺われる。『和語燈録』と『四十八巻伝』が、概ね歌ばかりを一カ所に集めてあり、他は法然の行状記述の一環として述べられる。すなわち『和語燈録』は五巻の巻末に、『四十八巻伝』は三十巻にまじり、伝法絵、四巻伝、弘願本、古徳伝は法然が晩年期に歌を詠んだ状況を伝記として記載している。伝法絵の成立年代から考えて、また出入りはあるが、他の伝記にも受け継がれていること、そして詠まれた状況がはっきりしていることも考え合わせると、G・M・U・Vの四首は問題なく法然真作といつてよいであろう。

さて『和語燈録』がいかなるところからG以外の九首を採り出したのか。さらには『四十八巻伝』がどこからAからSの九首を掘り出したのか。『四十八巻伝』のG・F・J・L・M・O・P・Q・Rは表を見ればかぎり明らかに『和語燈録』を参照しているであろう。Tに関しては『和語燈録』四

巻に出てくるので、単に見落としたと思われる。Rは、九巻伝・『四十八巻伝』では、法然の流罪が決定し、九条兼実と別れの挨拶を交わしたときに詠み合った歌として出されるが、それまでの伝記にはそのような場面の記載はないし、『和語燈録』にもそのことを表す詞書などない。和歌などはどういふ場面で詠まれたのか、いついかなる状況で詠んだのかということを表す詞書が重要である。その意味でもG・N・U・Vの四首はまず法然の真作として認めてよい。

詞書といえば、『四十八巻伝』の歌にはさまざまな詞書が付けられている。Aには「春」、Bには「夏」、Cには「秋」、Dには「冬」、Eには「仏法に逢ひて身を捨つるといへることを」、Fには「勝尾寺にて」、Gには「極楽往生の行業には余の行をさしをきてたゞ本願の念仏をつとむへし」ということを、「Jには「光明遍照十方世界念仏衆生攝取不捨のこゝろを」、Kは「三心の中の至誠心のこゝろを」、Lは「睡眠の時十念を唱へしという事を」、Mは「上人てつかからかきつけ給へりける」となっている。この中、A・B・C・D・E・G・J・K・Lは歌の内容を題として付けただけで、いつどこで詠まれたか判らない。真作とみられるGは伝法絵によれば、法然が讃岐国に流されたとき、ことのほか歓待され、その喜びの心を詠まれた歌で、Uの歌とセットでなければ本来の意味が出ない。『四十八巻伝』の草稿本といわれる九巻伝

	G	N	U	V	F	J	L	M	O	P	Q	R	T	W	A	B	C	D	E	H	I	K	S
伝法絵	下	○	○	○	○																		
四卷伝	2		○																				
和語燈録		⑤				⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	④									
弘願本		④	④	④									②										
古徳伝		⑦			⑧	⑧																	
九卷伝				⑥								⑥											
四伝巻八十	⑩	⑩			⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	⑩	※
十卷伝			⑧																				⑨

(1237)
 (1244)
 (1275)
 (1283~)
 (1301)
 (1312圓)?
 ※21, 28
 (1312~1324)?
 (1526)

には伝法絵と同じ場面でUの歌を出すのにGを出さず、『四十八巻伝』ではUをカットしている。確かに『四十八巻伝』のGの詞書がまちがっているわけではないだろうが、法然がUもGも同時に詠んだとすれば、『四十八巻伝』の題が法然の真意を伝えているとはいえない。またFは古徳伝では「聖人或時大谷の坊にて、西の方はるかに眺望したまひつゝ、くちずさせたまひける歌」となっており、どちらが正しいかは別にしても、『四十八巻伝』の詞書が法然の真意を表しているとは必ずしもいい難いのである。

以上のように、とりあえず『四十八巻伝』に初出するA・B・C・D・E・H・I・K・Sについては、『四十八巻伝』が参考にした文献が何であるか判明するまで真作と断定するわけにはいかない。ただ、『四十八巻伝』が『和語燈録』以外に参考にした文献の存在は想定できる。いまは紙面の都合上それには触れない。いずれにしても、新史料の発掘が重要になってくることはいうまでもない。現在真作といわれるものが、はたしてそうであるのか、まだ発見されていない法然の歌があるのか、さらに厳密に詰めていかねばならない。その上で歌に解釈をほどこしていくことが今後の課題である。

四 むすび

〈キーワード〉法然、和歌
 (佛教学非常勤講師)